

登山月報



第 54 回全日本登山体育大会を開催	2
世界ユース選手権、アルコで開催	4
第 84 回 Mountain World	6
新連載 「山の日」制定記念 —ふるさとの山に登ろう—	7
無雪期レスキュー講習会（西部地区）を登山研で実施	8
Mountain Sprit Project 2015 に参加して	9
平成 27 年度全国参与会報告	13
JMA、寄贈図書、編集後記	13

錦秋の栗駒山で第54回全日本登山体育大会を開催 ～「山の日」祝日制定記念 東日本大震災復興支援～

平成27年10月9日～11日までの3日間、宮城・岩手・秋田県にまたがる錦秋の栗駒山で、全国からお迎えした208名のみなさんと80名の地元役員によって、第54回全日本登山体育大会が開催されました。

宮城県での開催が決定してから、宮城岳連では、開催場所と日程、目的を検討しました。その結果、場所は大震災復興支援の一助とするために栗駒山、大会の時期は日本一ともいえる紅葉最盛期の10月上旬、栗原市の観光の妨げとならないようなしかも参加者がオプションツアーに参加しやすい日程としました。

大会目的は、『山の日』祝日化のプレ・イベントとして全国の山仲間が集い……東日本大震災復興支援の大会としたい。」とし、東日本大震災の復興支援を謳いました。そのため、「とどげよう 登山の力を東北へ！」という大会スローガンを設定しました。

今大会は、東日本大震災と岩手宮城内陸地震の二度の大震災で被災した栗原市の復興途上の理解と復興支援、山体の一部が大崩壊した栗駒山の現状把握と自然保護への理解など、東日本大震災復興支援を掲げたことに特徴があります。また、行政の全面的な支援も特徴でしょう。

したがって、崩落現場を見られるコースの設定、三県から登るコースの設定、被災地支援としての栗駒山麓への宿泊、地元旅行業者の活用、被災地支援オプションツアーの開催等を基本的事項として、大会準備を始めました。

その一方で参加者の皆さんの利便性、安全面、運営方法の吟味、栗原市の支援等により、開会式会場や大会内容の変更など大会直前まで変更事項がありました。

栗原市の支援としては、JRくりこま高原駅から会場



山頂・Aコース



みちのく伝創館での開会式

までのシャトルバスの運行、駐車場の整理、開会式場の準備や看板の作成・設置、会場でのおもてなし、郷土芸能の披露、講演会講師、下山口での誘導等、多岐にわたりました。

参加者の輸送については、宿舎の分散、6コースからの集中登山と1カ所への下山、自家用車での移動が困難、参加者の安全確保などの理由から、全て計画輸送にしました。そして、登山時には、一定時刻まで緊急車両としてバスを登山口に待機させることにしました。また、鳴子への輸送時には、9月にジオパークとして認定された荒砥沢ダムでジオガイドの説明を予定しました。

宿舎については、栗原市内には200名以上収容の宿泊施設がなく2日目は鳴子温泉としましたが、輸送時間がかかるうえに畳敷きの大広間しかないことがネックでした。しかし、2日間とも温泉とすることの方が、参加者には魅力的になると考えました。

登山道については、二度の大震災から徐々に登山道が再開されてきましたが、コース調査や整備がほとんど行われていないコースもあり、1年前に全コース一斉の下見登山をし、その後はコース毎の下見、栗原市のコース調査への同行、無線通信調査、ロープの設置等の安全対策に取り組み、準備をしてきました。しかし、9月の関東・東北豪雨により、沢に設置したハシゴや登山コースの一部流がされたりするなどの被害がありました。

大会第1日目、歓迎セレモニーとして復興支援に感謝するために栗原市の郷土芸能が披露され、盛大に開会式が挙行されました。その後、栗原市副市長による「二度の大震災と復旧・復興」と題しての講演がありま



山頂・Fコース

した。同時刻、別室では日山協参加会が開催されました。

終了後、コース毎にバスで宿舎へ移動しました。Cコースは宿舎が遠いため、講演会を割愛しました。各宿舎では参加者同士の交流が図れました。

第2日目。日付が変わったところと明け方に雨が降りました。風は少し強かったのですが、まずまずの天気恵まれました。最長コースタイムのAコースは、5時30分には登山を開始しました。紅葉を楽しみながら一部沢歩きの健脚向きのコースでしたが、2番目に山頂に到着しました。ルートが一番長いCコースも健脚ぞろいで、山頂には1番目に着きました。Dコースは一般登山者が少なく、マイペースで歩くことができました。Fコースはやや強い風に吹かれたものの、高原的な尾根歩きを堪能しました。その一方で、比較的楽なB・Eコースは、一般登山客による登山道の混雑と参加者の高齢化により、想定外の時間がかかってしまいました。

各コースとも昼食は山頂の手前で取り、山頂では大勢の一般登山者や観光客でごった返していたため小休止と集合写真を撮る程度に留めました。山頂付近の紅葉は例年より早く、2週間ほど前に最盛期を迎えたため、参加者にはちょっと残念だったと思います。

しかし、栗駒山の紅葉がきれいな場所は、下山道の中央コースです。各コースの参加者は一般登山者や観光客の間を縫うようにしながら下山道をゆっくり歩き、栗駒山の紅葉を満喫しました。下山口では、宮城岳連の役員が参加者を拍手と握手で出迎えました。何よりも天候に恵まれ、参加者の思い出に残る山行になったことと思います。

下山後はハイムザール栗駒での物産市に立ち寄り、鳴子温泉に向かいました。荒砥沢ダムに立ち寄る予定でしたが、9月の集中豪雨による路盤崩落のため実現できませんでした。

宿舎に着くと、さっそく名湯の温泉で汗を流しました。交流会では宮城県を中心とした東北の民謡を聞いていただきました。ただ、鳴子で一番大きいホテルとはいえ大広間が窮屈なほどでしたので、参加者同士の交流が十分に図れたとは言えない状況でした。また、畳敷きのため、足の悪い人にとってはつらいものがありましたが、「食事がよかった。」「食べきれなかった。」と大勢の方から好評でした。

第3日目。閉会式の直前、総勢40人で南三陸町・気仙沼市への被災地支援ツアーが出発しました。大会開催中に新たに12人の申し込みがありました。閉会式では、おおむね良い大会だったとの講評がありましたが、閉会式に出席しないで無断で帰った参加者が数十名いました。

閉会式に残った方にアンケートを実施しました。紅葉、温泉、食事、役員や栗原市の対応等、高評価をいただきました。「大会への参加が被災地支援になったとしたらうれしい。」との感想も多々ありました。課題としては参加者の高齢化、同一歩調で登山行動ができない人の参加のあり方、若年層の参加の推進、大会の方向性の明示などの指摘がありました。「役員・老人コースを設定してほしい。」との声には、登山体育大会のあり方が問われていると思われます。中には、開催目的やスローガンを理解していない方がいたことは残念でした。折に触れて目的や日程、宿舎、輸送などについて周知する必要があったと思いました。

まとめとして、栗原市や名鉄観光との連携が図れたこと、最大で約220名の申し込みがあったこと、天候に恵まれたこと、大多数の参加者のみなさんが満足された大会であったこと、そして宮城岳連へのお褒めの言葉をいただいたことに感謝して54回大会の報告といたします。北は北海道から南は宮城県まで32都道府県から参加されたみなさん、ご参加いただき、本当にありがとうございました。

(大会本部長
齋藤英次)



山頂・Dコース

世界ユース選手権、アルコで開催

2015年8月28日～9月6日まで I F S C World Youth Championships (以下、世界ユース) がイタリアのアルコで開催され、約50カ国、総勢1200名以上の選手が参加し、例年以上の大きな盛り上がりを見せた。また今回から、新たにボルダリング種目が追加されたこともあり、これまでの日程から大幅に拡大され、約2週間に及ぶ長期大会となった。前半にボルダリング、間にスピードを挟んで後半にリードという、3種目出場する選手にとってはタフさも求められる日程である。

日本からは、ボルダリング(18名)、リード(17名)を合わせて35名の選手が参加し、うちボルダーでは5名の選手が決勝に進出し、緒方良行(ユースA)が優勝、野中生萌(ジュニア)と原田海(ユースA)、土肥圭太(ユースB)の3名が準優勝という好成績を収めた。一方リードでは、7名の選手が決勝に進出し、是永敬一郎(ジュニア)、田嶋あいか(ユースA)が3位に入った。

他国の動きをみると、ボルダリングとリード両種目とも、イタリア・アメリカ・スロベニア・フランス・ロシア等これまで目立っていなかった国が決勝に多く残っており、且つ入賞レベルまでパフォーマンスが向上していた。また、これらの国はスピードにも参加し、オリンピックフォーマットにもなっている複合種目に力を入れ始めていることも窺えた。

【ボルダリング】

ボルダリングは今回が初めての大会であったため、どのようなレベルの選手が集まるのか、大会が始まるまで分からなかったが、大会サイドも私たちと同様に、選手たちのレベルや規模が分からず苦戦しているように思えた。その例として、予選に関しては1完すれば準決に進出できるような厳しい課題が多かったのに対し、準決勝・決勝では確実に落とさなければならな



い課題が多く、最初に出てきた選手の動きを見てセッターが後半の課題を試合中に変更するというも行われ、混乱の多い大会であった。

特に女子のユースAやジュニアのカテゴリーに関しては、Janja Garnbret (SLO) や Margo Hayes (USA)、Stasa Gejo (SER)、Jessica Pilz (AUT) といったW杯のファイナリストが多く出場していたこともあり、予選から決勝まで厳しい課題が設定され続け、登れないことで気持ちを切り替えるのに苦労する選手もいたように感じる。

その中で、ジュニアでは野中生萌が粘り強い登りを見せ、準優勝を果たした。ユースAの日本チーム4名も果敢に挑戦したが、世界のトップの壁は分厚く、準決勝ではじかれてしまった…。ユースBについては、海外の選手との体格差が顕著に出ており、物理的に不利な場面も見られたが、同カテゴリーで優勝した白石阿島(USA)は体格差を思わせない安定した登りを見せ、圧巻であった。

男子は、今期W杯ランキング1位の Jongwon Chon (KOR) が凄まじい集中力を見せ、2位の Pelorson Nicolas (FRA) にボーナスの1アテンプト差で優勝した。同カテゴリー(ジュニア)の 榑崎智亜も健闘したが、惜しくも1ボーナス差で3位入賞を逃した。ユースAでは、優勝・準優勝を収めた緒方良行と原田海が終始大会の流れを自分のモノにしており、様々な課題にうまく対応できていた。ユースBの土肥圭太は、冷静に1つ1つの課題に対応し、準決勝の5位から一気にランクアップし準優勝を収めた。

初の大会で5名が決勝に進出、うち4つのメダルを獲得できたことは快挙である。選手の努力の賜物だ。



問題は来年度以降、これを維持できるかどうかである。今回、男子のユースAやBは女子と違いW杯のファイナリストがあまり出場していなかったため、大人の大会での位置付けが不明瞭であった。今回の結果を追い風に、選手たちのさらなる飛躍を期待したい。

【リード】

リードに関しては、従来通り日本チーム全員が準決勝に進出したものの、決勝進出者が7名、そのうちの2名が3位入賞と、ボルダリングの成績を見るとやや少ない印象を受ける。

理由は、前述したように、これまでそこまで目立っていなかった国が強化を始め、追い上げてきていることや、ボルダリング同様、準決・決勝は確実に上部まで／完登しなければならないようなルート設定が多く、選手にはプレッシャーのかかるものであったためである。

特に男子のジュニアとユースAの決勝ルートでは、途中でダイノが出てきて、選手にとってはメンタルを揺さぶられるルートであった。まずユースAから競技が行われ、その後同ルートをジュニアが登るという競技順だったのだが、ユースAのルートが下部から悪く、誰もダイノのパートに到達することなく順位が決まった。中上太斗と緒方良行もダンゴになっていた核心部を抜けられず、5位と7位に終わった。

それを受けて、急遽？ ジュニアのルートが易しくアレンジされ、最初に出てきたGrupper Jesse (U S A) が完登してしまい、準決勝で1位、2位、4位につけていた是永敬一郎、波田悠貴、榎崎智亜は完登しなければ優勝／入賞できない状況に追い込まれた。しかし、惜しくも波田悠貴と榎崎智亜はダイノのパートで落とされ、順位を落としてしまった。是永敬一郎はそのパートを抜けられたものの、最後のホールドまで到達することができず…奇しくも3位に終わった。

男子のユースBでは、ボルダリングで準優勝した土肥圭太に期待がもたれたが、緊張の中、落ち着いて1手1手進めていった小西桂が決勝に進出。順位を1つ上げて7位で終了した。

女子については、ボルダリングでもメダルを獲得していたJanja Garnbret (SLO)やMargo Hayes (U S A)、Jessica Pilz (A U T)、白石亜島 (U S A) がリードでも入賞しており、世界との差を見せつけられたと同時に、女子の場合はボルダー力や筋力UPが核心部を抜けられる鍵になるのではないかと感じた。日本チームでは唯一、田嶋あいかが決勝に進出。バランスや保持の悪い核心部をいくつも抜けて、激戦区のユースAのカテ

ゴリーで3位に入った。

【スピード】

日本からは参加者がいなかったが、前述したように、イタリア・アメリカ・フランス等これまで力を入れていなかった国がチーム一丸となってスピードにも力を入れ始めていることが窺えた。オリンピックは2016年8月のリオで本決まりになるが、これは、明らかに2020年のスポーツクライミングの複合種目を意識した動きである。

また、今回イタリアやアメリカはボルダリングとリードで決勝に進出している選手がスピードでも活躍しており、3種目で勝負するためには、彼らの様に技術だけでなく筋力や総合的な体力(タフさ)も要求されるだろう。

日本には正式なスピードウォールが無いという弱点はあるが、日本選手も少しずつスピードに取り組む動きが出てきているし、W杯や海外合宿で経験を積むことで対応していける可能性もある(もちろん自国に正式なウォールがあるにこしたことはない)。

以上のように、まだ本決定ではないが2020年のオリンピックを視野に入れ、様々な国がチーム一丸となって選手の強化を始めている。日本チームは残念ながら、世界ユースでは他国に出遅れる形となったが、彼らのポテンシャルがあれば、複合になろうとも勝てる能力は備えている。ユースの選手たちは磨けば光る原石ばかりである。まずは、また来年の世界ユースで選手たちの活躍を期待したい！

【日本チーム 結果】

ボルダリング				
	男子	成績	女子	成績
ジュニア	榎崎 智亜	4位	野中 生萌	2位
	清水 裕登	11位		
	渡邊 海人	14位		
	波田 悠貴	22位		
ユースA	緒方 良行	1位	田嶋あいか	8位
	原田 海	2位	金子 桃華	14位
	豊田 将史	14位	戸田 稀	19位
			大場 美和	21位
ユースB	土肥 圭太	2位	中村 真緒	18位
	中村 颯人	10位	清水陽華莉	24位
	河上 紘輝	28位	樋口 結花	26位
リード				
	男子	成績	女子	成績
ジュニア	是永敬一郎	3位	義村 萌	20位
	波田 悠貴	7位		
	榎崎 智亜	8位		
	島谷 尚季	11位		
ユースA	中上 太斗	5位	田嶋あいか	3位
	緒方 良行	7位	錦織 美里	9位
	豊田 将史	17位	中村祐香里	10位
ユースB	小西 桂	7位	小島 果琳	10位
	田嶋 瑞貴	10位	西田 朱里	17位
	土肥 圭太	16位	曾我 綾乃	24位

第84回 Mountain World

ヒマラヤ登山 2015年秋

池田常道

春の大地震からの復興を急ぐネパールには、例年ほどのにぎわいは見られなかったにしても、予想を上回る登山隊が入国。8000 m峰ではマカルー、エヴェレスト、ローツェ、マナスル、アンナプルナ、ダウラギリの6座が試みられたが、マナスル(8163 m)を除いてすべて失敗に終わった。エヴェレスト以下チベットの高峰が中国側の事情で入山が禁止されたため常連の公募隊はマナスルに集中、108名の外国人登山者が許可を得た。シーズン当初からルートワークをリードしたH I M E Xなどの有力公募隊は、頂上攻撃の段階で悪条件に阻まれたが、その後を受けた各隊が9月30日から10月2日の好天期間に頂上を踏み、シェルパを含めて80人以上の成功を見た。このうち、10月1日に登頂したサミット・クライム隊で1名の遭難死が出ている。

エヴェレスト(8848 m)では、今回が5回目の挑戦となる栗城史多(33)が、チベット側からサウスコルの通常ルートに変更。10月7日夜に最終キャンプ(7700 m)を出て、夜中前にサウスコルを通過したが、翌日バルコニー下の8150 mに達したところで断念した。この結果、エヴェレストは1974年以来41年ぶりに登頂者なしに終わった。マカルー(8485 m)のスキー滑降を目ざしたアメリカ隊(エイドリアン・ボーリンガー隊長ら5人)は9月30日に7450 mで断念。ローツェ(8516 m)では、ホン・スンテク隊長の韓国隊が昨年引き続き南壁に挑戦したが、失敗に終わった。アンナプルナ I 峰(8167 m)では、フランス陸軍高山会(GMHM)隊が南壁の1981年イエティ同人ルートを狙ったが、気温が高いため予定していた氷の帯が消失、落石の頻発で敗退した。フランスのヤニック・グラジアーニとパトリック・ヴァニョンは、1988年に登られたダウラギリ I 峰(8167 m)南西バットレスの第2登を狙ったが、こちらも敗退に終わった。

マナスルを除いて8000 m峰が不調に終わった一方、6000 m～7000 m峰では注目すべき登山が行われた。そのひとつはマナスル山群のツラギ・チュリ(7059 m)で、アレクサンドル・ゲーコフ、ワレリー・シャマロ、イワン・ドズデフ、ルスラン・キリチェンコのロシア隊が西壁(1850 m、M 4 A I 4 5.10)から初登頂

した。2011年春にベラルーシ隊が南面から試みて2人を失ったピークで、シャマロ自身も2014年春に北東壁から挑み、頂上まで150 mを残して敗退していた。アンナプルナ山群のニルギリ南峰(6839 m)では、ハンスイェルク・アウアー、アレクサンダー・ブリュメル、ゲアハルト・フィーグルのオーストリア隊が南壁を初登攀、10月25日頂上に達した。しかし、フィーグルの体調が悪化したためビバーク、翌日南西稜を下降中に約800 m墜落してしまった。

西部ネパールでは、ミック・ファウラーとポール・ラムズデンの英国ペアが、2011年のゴジュン(ムグ・チュリ、6310 m)に続いてガヴェ・ディング(6400 m)に初登頂した。グーグルアースで目を付けた、最も大きそうな北壁を登った2人は西稜を下降した。

ロールワーリン・ヒマールでは3人の地元シェルパーニマ・テンジ、タシ、ダワ・ギャルジェが3つのピークをたて続けに初登頂した。10月4日にロンシャール(6224 m、北緯27度53分51秒/東経86度31分23秒)、5日にランダク(6220 m、北緯27度55分01秒/東経86度33分49秒)、6日にタカルゴ東峰(6152 m、北緯27度52分19秒/東経86度31分21秒)で、いずれも昨年解禁された104座リスト中の未踏峰。また、同じく地元のミンマ・ギャルジェ(29)は、山群東部のチョブツェ(6685 m)西壁をビバーク2回で単独登攀した。西壁の初登攀である。ヌプツェ東峰(7804 m)の南東バットレスは2003年に固定ロープを用いて登られたが、ウエリ・シュテック(スイス)とコリン・ヘイリー(米)はアルパインスタイルで挑んだ。それぞれ高所順応を終えてから攻撃に移り、初日に2200 mを登って6900 mでビバーク。しかし、前夜からの強風は2日目も吹きやまず、結局断念となった。なお、シュテックは、順応期間中にチョラツェ(6440 m)北壁をテンジ・シェルパと登攀。テンジはこの壁を登った初めてのシェルパとなった。このテンジもロールワーリンの4人も、公募隊ビジネスとはべつに、個人の登攀を求める傾向が強まっていることをうかがわせる出来事であった。

日本隊では、日本山岳会学生部隊(真下孝典隊長ら6人)が10月4日、東部ネパールのザニエ II 峰(6328 m)に全員で初登頂したが、もうひとつの目標ローナク(6710 m)は断念した。同志社大学隊(仙田裕樹隊長ら5人)も西部ネパールのアイチン(6055 m)に初登頂した。9月3日に3人、同8日に2人が頂上に立ったもの。

「山の日」制定記念

—ふるさとの山に登ろう—

秋田県・秋田駒ヶ岳(1637.4m)

秋田駒ヶ岳は秋田、岩手県境近くにある山で、秋田県の山の中では最もポピュラーな山といえます。足元には日本一深い湖として知られる田沢湖、その上には駒ヶ岳の西南斜面に広がる田沢湖高原、ブナの原生林の中で素朴な湯けむりをあげている乳頭温泉郷があり、冬季には田沢湖スキー場と、一年を通じて訪れる人も多く、秋田県南部の比較的遠くからもその山容が望まれ、身近な存在でもあります。

秋田駒ヶ岳の名は、最高峰の女目岳(1637.4m)を中心とした火山群の総称で、秋田県の最高峰でもあります。変化にあふれた山容であり、また山上からの展望も雄大です。特に高山植物の豊富さはすばらしいので毎年多くの登山者が訪れています。是非とも何回となく繰り返し登って頂きたいと思います。

登山コースは秋田県側八合目小屋からの入山が一般的で手軽です。自家用車での八合目乗り入れは、シーズン中規制されていますので定期バスを利用することになります。八合目には駐車場、トイレが整備されており、休憩場付きの小屋にも宿泊できます。頂上下の阿弥陀池畔にも避難小屋があり、駒ヶ岳の山小屋はこの二ヶ所だけです。山中のコースは網の目状についているので各自の体力と時間に合わせコースを組み立てるのもよいでしょう。八合目から阿弥陀池畔まで約1時間と比較的短時間で登ることが出来ますが、コース上からの眺めを楽しみながら、そして花の数300種に及ぶといわれる高山植物を確認しながら歩くのも良いでしょう。初心者や、子供たちでも安心なコースです。

岩手県側からは国見温泉が入山口です。定期バスは運行していないので、自家用車などの利用となります。ブナ林から小灌木帯と登り、横長根と呼ばれる県境稜線歩きのコース、大焼砂の火山礫にはコマクサの群生地があり、雪解けにチングルマの大群落がすばらしい。急斜面での落石や、遅くまで残る残雪に注意し慎重に登りたい一般向きのコースです。

秋田県側、中生保内口は、歴史的に信仰登山のメインコースでしたが現在登山者はあまり多くはありません。しかし五合目登山口より、火口原から流れおちる桧内川源流脇を登りカルデラ外輪の金十郎長根の尾根歩き、五百羅漢の断崖を通り男岳山頂に至るコースで、高山植物も豊富なコースです。また、水沢口は、スキー場駐車場から歩きだし、沢を挟んで対岸の水沢尾



八合目からの女目岳

根をダイレクトに金十郎長根の頭まで登り、中生保内コースに合流します。ブナ林から小灌木帯の展望のきく快適な登りです。

また、秋田駒ヶ岳の北方に見える乳頭山(1477.5m)までの稜線縦走のコースもあります。広々とした高山帯につけられた縦走路を湯森山(1471.7m)と笹森山(1541m)の二つのピークを越え、高層湿原あり、池塘あり、砂礫地帯あり、雪渓ありの変化に富んだ尾根歩きの日コースです。

ところで、秋田駒ヶ岳は火山の山です。山頂部は女目岳の南に男岳(1623m)を頂点とする馬蹄形の大カルデラが接しています。大カルデラの内部には中央火口丘の、女岳(1513m)、小岳(1409m)があり、1970年には女岳が噴火しました。ストロンボリ型噴火といわれ真っ赤な溶岩を高く吹き上げる豪快なもので、遠くからも火柱が見られました。噴出した溶岩流は黒々と積み重なっており、岩塊には地衣類や植物がみられます。しかし、女岳周辺では現在でも熱気を発しており、観測が継続されている活火山でもあります。

昨年の御嶽山の事故を受け、秋田駒ヶ岳でも避難小屋にヘルメットが常備してあります。また、登山者名簿への記入の徹底と注意喚起、緊急時の情報提供などにも取り組んでいます。

また、この山域の天候は変化しやすく、特に風の強さには定評があります。コースによっては残雪が遅くまで残っていたり、転落、落石などの危険もあります。危険な場所にうかつに立ち入ることは危険です。

駒ヶ岳山域は秋田県山岳連盟でも、夏季の各種事業や、冬季の講習会、山岳スキー大会などで利用する身近な山です。地域の方のみならず、多くの方々に訪れていただき、十分注意して登山を楽しんでいただくことを期待いたします。

(秋田県山岳連盟会長 齋藤喜代志)

平成27年度無雪期レスキュー講習会が9月11日（金）～13日（日）富山県の国立登山研修所で行われた。totoの助成を受け、縦走・ハイキング、セルフレスキューA、セルフレスキューB、ワークレスキューの4コース44名の受講者で行われた。今年はクライミング主体のセルフレスキューが多く、若い人も多かったのにぎやかな講習会となったが、人数的には限界であった。

縦走・ハイキングコースは主任講師を瀬藤常任委員が務め、受講者は12名であった。セルフレスキュー概論の講義の後、補助ロープの活用方法の実技、模擬登山道での活用練習、搬送法や救急法の実技として止血、捻挫の処置などの応急手当を行い、最終日は負傷者の応急手当と搬送を行う事故発生のシミュレーションを行った。

セルフレスキューは石田常任委員と一本松常任委員が主任講師を務め、受講者は25名であった。レベル差により2つに分けて講習が行われた。基本的なノット、流動分散、懸垂下降時のワンターンによる制動の実態、自己脱出、自己吊り上げ、リードビレイからの自己脱出、介助懸垂、背負い振り分け搬送などを行った。

ワークレスキューは町田常任委員が主任講師を務め、豪雨災害対応のため消防で欠席者が出たが受講者は7名であった。基本技術のおさらいの後、支点の構築、ルート工作、吊り下げ、吊り上げ、負傷者の搬送などを習得した後、最終日にシミュレーションを行った。机上での説明、受講者同士の考察を十分した後、実技に移るスタイルで、消防隊員のキビキビした動きもあって、効果的であった。

講師16名とあわせて60名での研修は食事や懇親会



の準備、後片付けも大変であるが、受講者の協力も得て大変スムーズに行えた。1日目は雨が降り室内講習となったが、2日目は晴天となり、3日目も何とか外で講習することができ、予定をすべて消化することができた。

次の積雪期レスキュー講習会（東部地区）は来年1月29日（金）～31日（日）に、谷川岳の土合山の家で行われますので奮ってご参加ください。内容は①日本雪崩ネットワークセーフティーキャンプ相当のクラス1②クラス2（雪質観察、ビーコン基本操作、雪崩の予防、シェルター、低体温症）、③クラス3（事故発生から搬出までのレスキュー技術、低体温症）で、クラス3はロープワークを含む基礎技術習得済みの方を対象とします。

（遭難対策委員長 西内 博）

このレスキュー講習会は、totoの助成（平成27年交付決定額1,795千円）を受けて年2回（無積雪期と積雪期）開催しております。



プロジェクトについて

隊員の募集要項によるとキルギス山岳会が主催し「アジアのクライマーを招いて友好を広げ、またキルギスの山や登山を知ってもらい、広く世界に紹介したいということ」を目的に、昨年から開催されたプロジェクトである。各国に対して①テクニカルクライミングチーム2名②レーニン峰登山チーム2名③取材チーム1名を募集したようだ。

日本からはレーニン峰登山チームに私を含めた2名が参加した。他のレーニン峰登山の参加者は台湾からの登山者2名と取材チーム1名が参加していた。またテクニカルクライミングチームにも台湾から何名か参加しているらしかった。他の国からの参加者については何も聞かなかった。

レーニン峰の登山について

現地において分かったことは、レーニン峰はガイド登山で大盛況な山と言うことだ。日本人にとってはなじみが薄く、出発前にネットで調べても日本からの記録は少なく他の国からも同様にそう多くの登山隊は来てないだろうと思っていた。しかし実際に行ってみると、ロシアは言うに及ばずヨーロッパ各国から登山に来ていた。

BCやABCには複数の山岳エージェントがテントを設営し登山者を受け入れており、ほとんどがガイド登山のようだ。私たちがお世話になったキルギス山岳会もエージェントを営んでおり日本人の登山者や台湾、オランダ、イギリスの登山者を受け入れ、それぞれがガイドを雇用し登山活動を行っていた。因みに上部キャンプもエージェントの営業テントが予め設営されている。

ついでにレーニン峰のキャンプの展開を記すと、3700mにBC、4200mにABCがあり、上部キャンプは5300m、6100m、6400mとなっている。ここでややこしいのは上部



ABCの様子(キッチンテントや個人テントが用意されている)

キャンプについてはそれぞれが好き勝手に名付けている様でそれぞれをC1, C2, C3という人もいればC2, C3, C4とする人もいた。多分、今までの記録もその記録によりそれぞれと思われる。さらに6400mのキャンプについてはほとんど使われていないようだ。ほとんどの登山隊は6100mからレーニン峰山頂の7134mアタックをかけているということであった。キルギス山岳会の会長のウラジミールもそのように現地の打ち合わせの時説明していた。

登山活動

最近、高い山に行っていないなあ、ネパールは地震があったし、パキスタンはビールが飲めないし、南米は遠いしとすぐく怠惰な考えを持っているクライマーである私が漠然と中央アジアに行きたいと思っていたところに日山協のこの募集を知った。これに行けたら面白いぞ、多分中央アジアは草原が広がりビールがうまいはずだという訳の分からない確信とともに出発した。

7月18日出発。飛行機はターキッシュエアライン、イスタンブール経由という一度キルギス上空を思いっきり通り過ぎ帰ってくるという少しおバカな空路であったがこれが安いということだ。モスクワ経由とどちらが良いかと旅行代理店に聞かれたのでイメージでトルコ経由。トランジットが半日ほどあったが、ターキッシュエアラインの乗り継ぎはなかなかお勧め。トランジットのお客は無料の市内観光ツアーに参加できるのだ。おまけに朝食と昼食付き。ツアーに参加して空港でビールを飲んでゴロゴロしているとあっという間にトルコを出発した。

7月20日、キルギスのビシュケクには朝の4時頃到着。ここから国内線に乗り換えオシユに向かう。キルギス山岳会の人も別に出迎えとかあるわけでもなく、また国内線のターミナルは国際線のターミナルの隣にあるのだが中で



5300mCamp

つながっていないので思いっきり迷う。重い荷物を引きずりながらひとまず売店でビールが販売されているかチェックをする。一応中央アジアはイスラム教の人が多いはずだし、もしかして店頭には置いてないかもしれないという懸念を持ちながらここまで来た。一目見てそれが払拭される。その途端、ここは良い国だなあという感想を持つ、何て安直なんだろう。後はレーニン峰に登るだけだ。

オシュには8時に着き、何とかピックアップをして貰う。もう1人の参加者の犬塚君にも合流。後はひたすら草原の中の道に向かい最後に2時間ほど舗装道路から離れてBCに15時到着。個人テントも用意され、食事を出していただき、初期順応も順調と考えていると夕方から雨が降り始める。おまけにBCにビールはなさそうだった。悲しい。

7月21日もそのまま雨。日本から強行軍で来たからレスト。

7月22日、この日も9時くらいまで雨。天気が全然すっきりしない。10時くらいより天候が回復したので裏山に順応に出かける。4150mにタッチ、引き返す。雪線は4500m程なのでこの日は単なる丘歩き。途中3900m前後で緑色の見慣れた植物が。そのあたりは一面に亘るねぎ畑だった。パミールが中国語で葱嶺と書くことを思い出した。昔、パキスタンに遊びに行ったときにそこにもねぎの群生を見つけたことがあった。斜面を登りながらねぎをかじってみたら少し硬く日本で食べているものよりスジっぽい。パミールって地理学上の定義は知らないが、パキスタン北部からこのあたりは一緒なんだなあと少し感動しながらかじる。後日、ラーメンに入れて食べたがやはり硬くていまいち。パキスタンのねぎの勝ちだ。

7月23日、BCからABCに移動する。10時出発、14時着。この日も曇り後午後より雨。荷物は馬方に運んでもらい順応のために荷物を軽くしてゆっくりゆっくり歩く。馬方のポーター賃は\$3/k g。

ついでに言うとガス缶はBCで購入できる。リチャージ\$6、新品\$10イスラエル製であった。リチャージでもトラブルはなく上部キャンプでも問題なく燃焼してくれた。

この日、ABCに入って初めてキルギス山岳会ウラジミールに会う。ここまでノホホンと来たわけだが

Mountain Sprit Project 2015の存在を疑うくらいキルギス山岳会の人間に会わなかったのでひとまず安心。

7月24日、ABCより裏山のYukhin Peakへ順応のため往復。このあたりの山域に言えると思うのだが南側と北側の斜面では全く様相が違うことだ。南側斜面は雪が全く着いていないガレ場なのに北側の斜面は雪面になっている。もしかしたらレーニン峰の南側(タジキスタン側)は全然様相が違うのかも。高度順応に上がったこのPeakも南側斜面を登ったので、単なるガレ場、順調にこなす。しかしこの日も曇り後午後から雨。この頃からあれ?晴天率80%と聞いていたのに(不確かな情報)またある人は予備日なんていらねえ、毎日晴天なんだからよおという強気発言を聞いていたのに...

7月25日、この日も同じように朝方まで雨。後曇り後少し晴れ間後雨。この日5300mキャンプまで行く予定もあったが初期順応に時間をかけたいという犬塚君の申し出によりABC滞在。それとは別に私たちは次の5000m代キャンプをどこに張るか迷っていた。これだけ雨が降っているのでクレバス帯の雪の斜面を通過する回数を減らしたいと考え、5300mCampに泊まって降りてくるだけならYukhin Peakに1泊しても変わらない。おまけに雪装備もいらないので軽いしということで気持ちは易きに流れた。慎重な犬塚君と怠惰なクライマーの意見は一致した。

7月26日、この日は珍しく朝から晴れる。Yukhin Peak(5075m)までテントを上げる。同じことを考えているパーティもいるらしく頂上直下のガレ場の少し平らなところはテントで一杯。張るところがないので少し離れて雪の上を整地するも途中で、1泊だからまあ大丈夫だと思い手緩める。夜中にしこたま後悔。



ニュージーランド北島のダイナミックな自然を満喫

**北島の名峰ルアペフ山、タラナキ山登頂と
トンガリロ・クロッシング 9日間**

発着地 東京 旅行代金 ¥596,000~¥612,000
 出発日 12/28(月)・1/23(土)・2/6(土)・3/18(金)
 ※燃油サーチャージは、旅行代金に含まれています。

旅行企画・実施 観光庁長官登録旅行業第490号/日本旅行業協会正会員/ボド保証会員

ALPINE TOUR SERVICE 株式会社

〒105-0003 東京都港区西新橋2-8-11 第7東洋海ビル4階 ☎03-3503-1911
 大阪 ☎06-6444-3033 名古屋 ☎052-581-3211 福岡 ☎092-715-1557
 e-mail: info@alpine-tour.com http://www.alpine-tour.com

登山者の安心安全を守る!

画期的アイテム新登場 **ブザー付GPS搭載端末** **位置が分かる**
 みんなの安心安全を守る **みまもり犬まもる**

- ▶ 遭難や事故時に救難メール
- ▶ 家族にワンッシュ安否報告
- ▶ いつでもリアルタイム検索
- ▶ あとから足取り確認

HELP!

株式会社ドンデ
 ☎03-6326-0407
 support@donde.jp
 詳しくはWEBで <http://mamoru.donde.jp/>

7月27日、この日も晴れる。さっさと降りて「どん兵衛」喰って昼寝。もしかして好天周期か、これから中央アジアの本領発揮かと1人テンションを上げながら「どん兵衛」を食べる。高度順応は2人とも順調！順調！あとは化石探し。結構、貝の化石を見つける。

7月28日、午前中晴れ。5時過ぎに出発、まだ暗い。ルート上にはワラワラと数珠つなぎ。ABC～5300m Campまではクレバス帯となった斜面が続く。踏み跡はしっかりしており所々には標識旗が設置されている。しかし場所によってはルートとデブリが交錯し、小さなセラック崩壊の雪崩も下から観察したこともあった。あまり気持ちの良い斜面ではない。しかし登山者はまさに玉石混淆状態。気にする人もいれば気にしない人も。11時30分、5300m Campに到着。非常にオーバーユーズ状態。人とテントで溢れかえっている。しかしトイレの場所や雪をとる場所は取り決めがない様で、テントから少し離れた所のトイレは見るも無惨状態。筆舌に尽くしがたい。さらに近くのカレ場には奇跡的に水が流れていたが使えるのかと見ていたらその近くもキジ場。

午後からは雪。水作ったり飯食ったりとゴロゴロと過ごす。夕方から風と雪が強くなる。29日は6100mを往復し30日にABCに降りる予定だった。

7月29日深夜、目が覚めるとまだ雪が降り続けている。ぱらつく程度の雪ではなく積雪になっている。風は弱くなっていたが、雪の降りは結構強い。この積雪がいつまで続くか分からないがすぐに降り止む感じでもない。今までと降り方が違った。この天候がいつまで続くかを考えた場合、降りるなら早い方がいい。トレースも消えかけており斜面が新雪で不安定となれば閉じ込められる。しかし降りれば全てのタクティスが崩れるし・・・等を考えてウツラウツラしていると少し明るくなり始めた。降雪は続いている。時間が遅くなれば雪崩も出そうだ。クレバスもヒドゥン化するかもしれない。犬塚君が目覚めたときすぐに下山しようと伝えた。彼もすぐに同意してくれた。もうすでに数パーティは下山を始めていた。6時15分下山開始。



レーニン峰



数珠つなぎの登山

トレースはすでに失っているところもありクレバスを踏み抜きそうになりながら降る。3時間ほどでABCにたどり着いた。周辺の氷河は普段はモレーンカバーされているのにその日は雪で真っ白に。下でも28日の夕方から降り始めたらしい。午後になって降りてきたパーティによるとルート上で何か所かなだれていたと聞く。この日は1日中雪。

7月30日、1日中雪かミゾレ。降り続く。タクティスは狂い6100mにタッチもしないで降りてきてしまった私たちはどうするか迷った。登るにしても撤収と飛行機の兼ね合いが出てきて時間が少なくなってきている。逆算すると最終的に8月1日に出発しなければ山頂まで届かないだろう。それまでに雪が止み、斜面が落ち着くだろうか。今のままでは突っ込めないしどうしようどうしよう？と落ち着かない気持ちのままこの日は終わった。ひとまず降り止まなければ出発できないので31日は無理ということだけは決まった。

7月31日、朝起きると曇り時々晴れ間時々ミゾレ後雨。天気はめまぐるしく変わる。上の方はまだガスの中の様だ。このまま天候が安定してくれればと望みを託す。これで斜面が安定すれば8月1日には出発できるだろう。半分自分に言い聞かせるに頭の中でそのことばかり考えていた。お隣さんのエージェントのテントサイトに天気予報が張り出されていると聞いたので散歩がてら見に行く。ネット情報だったが雨か雪の予報しか出ていない。日によってはHeavy Snowとある。憂鬱な気分が更に加速する。

夕方、少し晴れ間が見え上部斜面が覗けた。その時、昼間の晴れ間にはなかったデブリが見える。まだ全然安定していない。明日も突っ込めない。8月1日に出不来となると終了なのだけれど。テントに戻り慎重な犬塚君に明日も無理そうだと伝え、下山することを決めた。この頃になるともう天気に翻弄されることにつくづく疲れていたと思う。

8月1日、朝曇り、昼過ぎから雨。ABCで撤収の準備にかかる。後ろ髪を引かれる様な思いだったがもう天気

がどうなろうと関係ないという少しスッキリした気分だった。荷下げのための馬の手配や食料、燃料を整理して過ごした。

8月2日、BC撤収。BCでは、入山したときには手に入らなかったビールを飲み下山したことを実感する。

最後に

出発前の段階ではどのようなメンバーが集まり、どのような登り方をするのか分からない状況であった。個人個人で登るのか各国なのかそれとも国際隊のような形体をとるのかその場合、荷上げは？装備は？等々またキルギス山岳会の思惑はどうなのだろうと色々考えたのだが、私の拙い英語力では質問をするだけで一苦勞となり、こちらの意図も伝えることができないだろうと思い、少々乱暴だが、行けば何とかなるだろうで出発した。

とはいえ日本人メンバーの私たちは出発前に打ち合わせを行い、ひとまず2人だけでも行動ができるような装備や食料タクティスを打ち合わせできたのは良かったと思う。もう1人の参加者の犬塚君は学生であったので、40過ぎの私とは違いイケイケのクライマーだとしたらお互いに考え方が違いすぎることを危惧していたので。

キルギス山岳会の会長のウラジミールはレーニン峰のABCで会ったとき、彼の思惑は国際隊の混成チームのように行動して欲しい様であった。

しかしその時点で他のチームは台湾の取材チームの1名がいるだけでありレーニン峰登山チームの2人は飛行機にトラブルがあったらしくまだBCに到着さえしていなかった。その取材チームの1名と行動を共にする予定であったが、結局、上部行動初日は高度順応の違いもあり私たちは1日出発を延ばし、順応行動もABCの裏山に変えた。

この行動変更に関してウラジミールは相当難色を示していたし、我々の順応行動に対して自分の考えに沿わないことに不快であった様に思う。またその後到着した台湾のレーニン峰登山チームの2人は高所に対する考え方は私たちと相容れる様なものではなくこの時点で混成チームは同じタクティスで行動することはなかった。

この2人は到着が遅れたこともあってBCより全く順応行動もとらないままABCに来て、そのまま上部行動に突入し、ほとんどABCに降りて来ることはなかった。彼らは別に高所経験が豊富であった訳でもなく頂上に対してモチベーションが高いと言うよりは執着している様な感じを受けた。私たちは悪天に対してすごく慎重であったし、そのクレバス帯の雪の斜面の通過を極力少なくする様に考えていた。それが結局、登れなかった遠因にも繋がったとも思う。そのような慎重態度は他の隊員やウラジミールから見れば臆病に感じたかもしれない。なぜなら登山活動

が終わり首都ビシュケクでウラジミールに会ったときにもっとSpritが必要だったと言われたことが印象に残っている。

このように参加者の中でも、雪に対する考え方や高所に対する考え方、行動に対する考え方が相違し、更にキルギス山岳会のプロジェクトとしての思惑や会長のウラジミールの高所のタクティスに対する考え方等々、それぞれが大いに異なっていることがひしひしと感じられた。これらが統一される様にはとてもではないが思えない。今年は特に天候が悪く、それぞれの違いが現れたのかもしれないが、結局のところ意思疎通の図りやすい国ごとにパーティを組むのが無難なところになると思う。

また来年もこのプロジェクトが続くであろうから、その時の募集は2名で募集するのではなく1チーム2名で募集した方が参加者にとっても現地での登山活動においてもスムーズに進むのではないだろうか。

最後にキルギスはまだまだ日本に紹介されていない地域ではあるが、高所にしても岩登りにしても可能性は十分に残っているところだと思います。もしどなたか興味のある方がいるようでしたらキルギス山岳会に問い合わせをしてみてください。言葉のやりとり不安な方には朗報です。今年8月より2年間、キルギス山岳会に青年海外協力隊の三浦克己さんという方が活動しています。日本語で問合わせが可能です。これだけでも敷居が低くなるのでしよう。三浦さんには了承を得ております。

今回は晴天率80%と言われた山で20%も晴天がなく、天気に翻弄された登山でした。頂上を踏むことが出来なかったですが、少しはステップアップできた様に感じます。この経験が次回の活かされる山行が出来ればと考えております。

このような機会を与えてくれたキルギス山岳会および日本山岳協会の皆様、深く感謝しています。実力及ばずして頂上に立つことが出来ませんがキルギスの山の魅力に引き込まれ、また別の機会にキルギスの山に行ければと考えております。本当にありがとうございました。



平成27年度全国参与会報告

第54回全日本登山体育大会・宮城大会に合わせて10月9日に栗原市みちのく伝創館で全国参与会が開催された。日山協からは坂口・国澤・田中・本木各顧問、八木原会長、尾形・高橋副会長ら10名の顧問・役員が出席し、参与は全国から16名が参加された。C湯浜コース参加の方は、宿舎が遠いため開会式終了後直ぐに移動したため、参与会に出席できず、申し訳なかった。

八木原会長挨拶の後、この1年に逝去された3名の参与物故者に黙祷を捧げた。その後、出席者に自己紹介を含め近況報告をしていただいた。

本年度の永年参与感謝状贈呈者は、松尾壽(岩手)、尾形一幸(福島)、三森一男(福島)の3氏で八木原会長から感謝状が贈呈された。

次いで尾形専務理事より、平成27年度の組織・役員体制、財政状況、事業概況、スポーツライミングの五輪種目化などの現況を報告した。

参与からの質疑応答では、年々参与が減少している。永年参与の被表彰者が3名とは寂しい。もう一度全国に呼びかけて増員を図るべきではないか。全日大会の名称を変更してでも改革を進めて貰いたい。公益化に伴い理想の高い目標を掲げたが、未だ課題が山積している。今の2倍の仕事をして登山界の変化についていけるようスピード・アップして貰いたい。全日大会を日本体育協会のスポーツレクリエーションに何故入れないのか。スポーツ庁ができて何が変わったのか。祝日「山の日」制定記念事業は何をやるのか。などのご意見を頂いた。
(記 尾形好雄)

和田晴次・山岳絵画展

期 日 2016年1月21日(木)～26日(火)
11時～19時(最終日は18時迄)
会 場 GALLERY4匹の猫
(〒530-0013 大阪市北区茶屋町5-2
<http://4hikinoneko.com>)



平成27年度10月(27年10月)
常務理事会報告

日 時 平成27年10月8日(木)
18時～21時

場 所 岸記念体育会館103会議室

出席者 八木原会長、尾形・國松・高橋・
亀山各副会長、小野寺、西内、仙石、
森下、京オ、水島、瀧本、中瀬各常務
理事、中島監事
(常務理事13名中13名出席)

1. 議 事

- (1)平成27年度9月常務理事会議事録承認について
事前に送付しており異議なく承認された。
- (2)平成27年度「山の日制定」交付申請の承認について
東海ブロックの申請が異議なく承認された。これで全ブロックへの交付が終了した。
- (3)平成27年度「少年少女登山教室」交付申請の承認について
岡山県の申請が異議なく承認された。ただ、まだ申請していない岳連もあり、追加通知するようにと國松副会長から提示があった。
- (4)BMC-WCM派遣の承認について
2名の定員で、1名(大部良輔)は承認された。もう1名はBMC締め切り(10/19)前の早い時期に提案があればメール回議で承認を諮りたい旨承認された。
- (5)第65回日本スポーツ賞候補者推薦

について

今年度の経緯からみて競技部から選出もらうのがよい、とのことで競技部に一任された。また、過去の受賞経歴がほしいとの意見があった。

- (6)第8回ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞候補者推薦について

候補者推薦があれば事務局に一任

- (7)資格認定の承認について

- ①SC指導員(秋田)

実施日 8月8日～23日

指導委員会審議・認定10月5日

鈴木大、長谷川国広、中嶋治、田村妙子、坂本大輔、坂本康子、手塚慎弥、松本俊之、佐藤美香、正木牧子、昆脩太、國分一樹、寺沢寿朗、五十嵐圭、成田純也、中嶋真哉、高橋大樹、西川祥子、高橋具子、鈴木康永、山口純世(以上、21名が承認された。)

- ②ルートセッター合格者

実施日 平成27年8月17日～19日

場 所 富山県南砺市桜が池CC

- ・C級ルートセッター認定承認

佐藤優哉33(宮城)、笠原大輔26(長野)、徳永潤一26(愛媛)、中村雅志20(愛媛)、新川裕希20(千葉)、松島由希27(宮城)(以上6名が承認された。)

- ・公認ルートセッター認定承認

宮田尚文36(奈良)、山越政樹30(岐阜)、小西大介28(岡山)、福田宗次郎23(鳥取)(以上4名が承認された。)

- ③審判昇級者

実施日 (第18回JOCジュニアオリンピックカップ大会時 平成27年8月14日～16日)

場 所 富山県南砺市桜が池CC

藤江理恵(東京)、松尾浩志(三重)、

樽正人(千葉)、(以上3名が承認された。)

- (8)報告事項

- ア 会計月次報告(9月分)

未払金については早めに処理するよう監事の指摘があった。賞与引当も明確にするようにとの監事の指摘があった。ネパール募金は総額470万円になった。

- イ 和歌山国体報告(競技部)

森下競技部長から報告があった。心配された台風の影響もなく、期間中天候もよかった。成年女子で長崎代表がボルダリングで足を捻挫したが、それにもめげず出場をして健闘した。三笠宮親王信子妃や、鈴木大地スポーツ庁長官が視察に訪れた。日体協の原常務理事国体委員長や林副委員長にも来て頂いた。開始式とトロフィー返還式について、2日目にアイソレーションルームを会場にしてトロフィー返還式が行われたが、成年男子・監督のみの出席で凡そふさわしくない会場であった。それならば初日には多くの役員等が集まるし、多くの時間を割くわけでもなく、開始式にして、トロフィー返還式にしてもおかしくはない、とのことで、検討をお願いした。また、服装、頭髪、態度、などマナーに欠けている。選手ばかりでなく、スタッフにも問題があるとのことであった。

- ウ 東京五輪2020年追加競技種目推薦について

尾形副会長から資料に基づいて報告があった。また、既に広告代理店として博報堂から積極的なアプローチがあり、電通からのアプローチより具体的であり、博報堂と話を進め

ていきたいとの報告があった。博報堂の提案は5つの大会を総合的に契約、代表ユニフォームのロゴ掲示をするものである。5つの大会とはボルダリングジャパンカップ、日本選手権/日本ユースクライミング選手権、IFSCWCup加須大会、全日本クライミング・ユース選手権ボルダリング競技大会、リードジャパンカップである。これには高校選抜大会は入らない。勿論従来のマムート、八海山醸造との絡みがあり、それによって金額は多少上下するが、総額的には変わらない。

エ 平成27年度中高年安全登山指導者講習会(西部地区)について(登山部普及委)

なかなか人が集まらず締め切りを、京都府岳連とも連携して、延長した。いまのところの応募者は14名である。

オ 全日大会10回参加及び永年参与表彰について

尾形副会長から提案があり、異議なく承認された。また、参与の数が減少しており、各岳連からも参与を推薦してほしい。

カ 「第2回全日本クライミング・ユース選手権ボルダリング競技大会」開

催について

競技部から報告があった。来年度も鳥取県山岳協会では開催したいとのこと。今年度については、会計処理等について日山協と齟齬があったが、今回はないと思うので続けて行いたい。日山協には迷惑をかけないつもりであるとのこと。

キ 全日本パラクライミング選手権大会2016について

競技部から別用紙で提案があった。しかし、これは元々の予算にも入っておらず、資金的な裏付けも含めて次回の常務理事会に提案してもらうことになった。

2. 専門委員会動静(9月16日~10月7日)

【報告】

(1)ジュニア・普及委員会 9月28日(月) 出席者3名、委任4名

ア ジュニア登山教室 in 立山2015報告

イ ジュニア登山教室の今後の展開について

(2)遭難対策委員会 9月30日 出席8名

ア ロープ強度試験(ロードセル利)について

イ 積雪期レスキュー講習(1月29日~31日)について

ウ 指導との合同会議(10/14、都岳連事務所)について

エ 平成28年度総会(関東)について

(3)指導委員会 10月5日(月) 出席者9名 委任4名

ア 指導員受講資格について

(4)デジタル情報チーム 10月1日(木) 出席者4名 委任3名

ア HPのアンケートについて

イ Google Analyticsに結果について

ウ HPの当面的問題点について

エ DIチーム運営体制について

3. 日誌(9月18日~10月7日)

(1)博報堂打合せ 9月24日(木) 於:スポーツマンクラブ 八木原会長、尾形副会長、小野寺事務局長、小日向委員長

(2)2020東京五輪追加種目に関する記者発表 9月28日(月) 於:岸記念体育会館 八木原会長、尾形副会長、小野寺・森下常務理事、小日向委員長

(3)パキスタン大使館 サミナメベイクさんとのタペレセプション 10月2日(金) 於:パキスタン大使館 小野寺事務局長

(4)全国「山の日」協議会運営委員会 10月2日(金) 於:日本山岳ガイド協会 尾形副会長

(5)第70回和歌山国体山岳競技大会 10月2日(金)~10月5日(月) 於:和歌山県みなべ町 八木原会長、國松副会長、森下常務理事、西原・小日向・山本委員長

(6)第2回救助技術高度化検討会 10月5日(月) 於:丸の内永楽ビルディング24F 町田副委員長

(7)国立登山研修所「登山研修」編集会議 10月6日(火) 於:日本スポーツ振興センター 尾形副会長

(8)博報堂打合せ 10月7日(水) 於:スポーツマンクラブ 尾形副会長、小野寺常務理事

寄贈図書

寄贈本誌	山と溪谷社(株)ネイチエアエンタープライズ	「古道巡礼 山人が越えた径」高桑信一 著「岳人」No.821 2015 11月
	山と溪谷社	「山と溪谷」No.967 2015 11月
	日本山岳写真協会	「日本山岳写真協会ニュース」第426号
	(一財)熊本観光コンベンション協会	「くまもと観光コンベンションニュース」2015 Autumn
	(公財)健康・体力づくり事業財団	「健康づくり」2015 10 No.450
	横浜山岳会	「月刊山」1000号
	(公財)日本体育協会	「体協スポーツニュース・フェアプレイニュース」9月28日号
	兵庫県山岳連盟	「兵庫山岳」27年10月1日 第580号
	(公財)日本ボウリング協会	「JBCニュース」第527号
	トータル・オリンピック・レディス会	「TOLだより」2015年第30号
	(公社)国土緑化推進機構	「ぐりーんもあ」第71号
	(公社)日本武術太極拳連盟	「武術太極拳」No.312
	(株)スクールパートナーズ	「高校生新聞」第230号
	(公財)日本体育協会	「体協スポーツニュース・フェアプレイニュース」2015年10月13日号
会報	徒登山岳会	「徒登山」28号
	(公社)日本山岳会 自然保護委員会	「木の目 草の芽」第118号
	中国登山協会	「CHINA OUTDOOR 山野」2015/10 総206期
	日本勤労者山岳連盟	「登山時報」No.489
	(公財)尾瀬保護財団	「はるかな尾瀬」vol27
	(一財)日本防火・防災協会	「地域防災」2015-10 No.4
	La rivista del Ciub alpino italiano	「Montagne 360」ottobre2015
	日本ヒマラヤアドベンチャートラスト	「H A T - J N E W S」No.99
	日本山岳会	「山」10月号 No.845
	愛知県山岳連盟	「愛知岳連ニュース」第415号
	やまびこ山想会	「やまびこ」第161号
	埼玉県山岳連盟	「埼玉岳連」第52号
	おいらく山岳会	「山行手帖」No.671
	東京野歩路会	「山嶺」No.1028
	Corean Alpine Club	「山」Vol. 244
	NEW ZEALAND ALPINE CLUB	「THE CLIMBER」92 WINTER2015
	(公財)日本体育協会	「体協スポーツニュース・フェアプレイニュース」10月26日号

NPO法人 北丹沢山岳センター

事務局 〒252-0184 神奈川県相模原市緑区小淵1545-1
TEL 042-687-4011 FAX 042-687-3980
E-MAIL kitatanzawa@kib.biglobe.ne.jp

蛭ヶ岳山荘 TEL:090-2252-3203(衛星電話)

神の川ヒュッテ TEL:042-787-2276

和田峠「峠の茶屋」TEL:042-687-2882

ユージンロッジ安全管理 TEL:042-687-4011

理事長・代表 杉本憲昭

NPO法人 北丹沢山岳センター

神奈川県・山梨県東部トレイルラン連絡協議会

事務局 〒252-0184 神奈川県相模原市緑区小淵1545-1
TEL 042-687-4011 FAX 042-687-3980
E-MAIL kitatanzawa@kib.biglobe.ne.jp

- 北丹沢12時間山岳耐久レース実行委員会
- 陣馬山トレイルレース実行委員会
- 八重山トレイルレース実行委員会
- 東丹沢宮ヶ瀬トレイルレース実行委員会
- 上野原秋山トレイルレース実行委員会
- 陣馬高尾ムーンナイトトレイルレース実行委員会
- 峰山トレイルレース実行委員会

大会々長 杉本憲昭

編集後記

2020五輪競技候補にスポーツクライミングが推薦され、一方では「山の日」祝日化と本協会の真価が問われる課題であり、まさに競技と登山の両輪が駆動しなければ取りは困難だ。「山の日」に関する全国規模の行事としては民間学校など子供対象の行事を一定期間(8月11日前後1週間)内に実施する様な案は如何なものかと思えます。妙案があれば事務局に一報を。(広報担当 水島彰治)

登山月報 第560号

定価 110円(送料別)

予約年間 1,300円(送料共)

昭和45年12月12日
第三種郵便物認可
(毎月1回15日発行)

発行日 平成27年11月15日

発行者 東京都渋谷区神南1-1-1
岸記念体育会館内
公益社団法人日本山岳協会

電話 03-3481-2396

FAX 03-3481-2395

山岳
雑誌

岳人

山と人、
時代をつなぐ
「がくじん岳人」。

ひとたびページをめくると、先鋭的な現役クライマーから、散策を楽しむ登山愛好者、一線を退いた往年の登山家まで、「岳」を愛するすべての人々の想像力と冒険心をかきたてる、そんな存在でありたい。山の魅力や楽しさ、そこで生まれた文化を伝え、山と人との関係をより良いものにしたい、そんな思いを込め「岳人」をお届けします。

年間購読がおすすりめです。

購読割引 **送料無料** **限定品プレゼント**

年間購読なら、お得な価格で毎月お手元に冊子が届きます。

通常本体価格12冊 年間購読12冊
8,160円 (+税) → **7,480円** (+税)
(税込8,812円) (税込8,078円)

1年間で680円
1冊分無料



岳人オリジナル
手ぬぐい & ペーパーナイフ



12月号
11/14発売

「岳人」12月号

【特集】スノーシューとスキー

【好評連載】夢枕 獺「神々の山嶺」創作ノート
／フリチョフ・ナンセン「グリーンランド初横断」
／石川直樹「まれびと」／秘境探訪 ほか

本体価格 680円
★モンベルのウェブサイト、全国のモンベルストアや書店にて発売中!

年間購読
お申し込み方法

◎ウェブサイトで
<http://www.gakujin.jp>

◎お電話で (受付後に振込用紙をお送りします)
☎ 0120-982-682 / TEL 06-6538-5797
※フリーコールは携帯・IP電話からはご利用いただけません。

◎全国のモンベルストアで
<http://store.montbell.jp>

立ちどまらない保険。

MS&AD

三井住友海上



三井住友海上の安心

GK

www.ms-ins.com



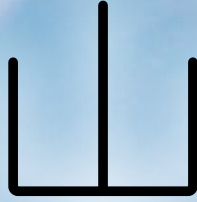
JMA

守ります。美しい日本の山。

祝

8月11日

(2016年より)



国民の祝日

山岳保険は

日本山岳協会 山岳共済会

<http://sangakukyousai.com>

〒170-0013 東京都豊島区東池袋3-7-11-707

TEL:03-5958-3396 FAX:03-5958-3397

E-mail:sangakukyousai@mbd.ocn.ne.jp

月～金 10:00～17:00(祝日除く)

Webからも申込みます